実践英語 オンラインで

スチューデントガイドプログラム コロナ禍で変更

日常生活や地域の魅力 留学生と語り合い

瀬戸内国際芸術祭の会場の一つとして国内外に知られる宇野港周辺で、市内の生徒が地域の魅力を学びながら外国人と触れ合い、国際感覚やコミュニケーション力を育む「たまのスチューデントガイドプログラム」。新型コロナウイルスの影響で外国人の来訪が激減して現場での実践が難しい中、市教委はオンラインによる外国人との交流機会確保に乗り出した。（松山定道）

7日の初回は、玉野高1年生4人が学校から参加。岡山市在住のカナダ人留学生キティさんと市立図書館・中央公民館に集まった観光ボランティアガイド「つつじの会」、芸術祭ボランティアサポーター「こえび隊」をビデオ会議システムで結び、宇野港周辺の現代アート作品や観光スポットの写真を共有しながら、玉野の魅力や日常生活について語り合った。

玉野魚市場シーサイドマート（宇野）の写真では、生徒が「刺し身を買ったことがある」とアピール。サーモン、タイ、アジなど好きな魚を挙げた。生徒から英語が出てこないときは、外国人の案内に慣れたボランティアがすかさず助け船を出し、会話を進めた。

キティさんは「カナダは世界中の料理が入っている」とし、名物料理プーティン（ソース、チーズを絡めたフライドポテト）を紹介。「直島には行ったことがある。玉野で高校生に会ったら話してみたい」と呼び掛けた。

同プログラムは2018年度から本格実施。地方創生と国際理解の観点から、宇野港の現代アートなど地域の魅力を学ぶ「育成」と、船を待つ外国人観光客らに英語で話し掛ける「実践」の2本柱で取り組んでいる。

今回もボランティアと事前学習を行い、生徒は瀬戸内の魅力を考えてから集まった。渡邉来望さん(16)は「英語で伝えるのは難しかったけど頑張った。外国の人が困っているとき、話し掛ける自信がついた」、広瀬佑衣さん(16)は「実際に話してみると学校で習う英語とちょっと違う。もっと話せるよう勉強したい」と話した。

オンラインの会話は表情が見えづらいものの、特定の人ばかりが話すことになりにくい利点がある。また、通信回線と端末があれば自宅からでも参加できる。市教委社会教育課は「コロナ禍だからといって学びの機会をなくすわけにはいかない。22年の次回芸術祭に向けて着実に経験を積み重ねたい」と12月以降も継続的に実施していく方針。

▲ビデオ会議システムで玉野高生とカナダ人留学生の会話を取り持つ観光ボランティア＝市立図書館・中央公民館

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2020年11月11日 山陽新聞朝刊 24ページ